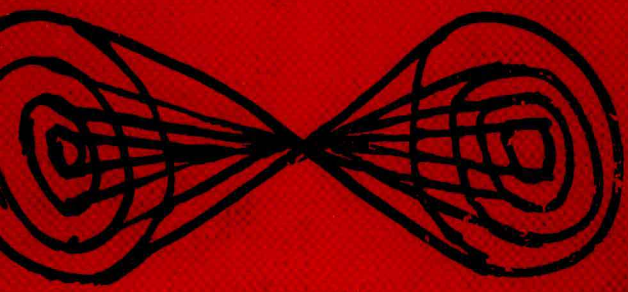


キルケゴール

世界文学



# キルケゴール

誘惑者の日記  
おそれとおののき  
。 反 復  
死 に いた る 病



世界文学大系 27

---

キルケゴール

---

昭和36年3月20日発行

訳 者 梶 田 啓 三 郎

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 多 田 基

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8  
振替東京 4123 電話 (291) 局 7651

---

## 目次

誘惑者の日記

榊田啓三郎訳 5

おそれとおののき

榊田啓三郎訳 122

反復

榊田啓三郎訳 215

死にいたる病

榊田啓三郎訳 286

キルケゴール

ルードルフ・カスナー  
大山定一訳 383

解説

榊田啓三郎 401

年譜

417

裝  
幀  
庫  
田  
發

キルケゴール



## 誘惑者の日記

彼が情熱をかたむけるのは  
うらわかいむすめよ

ドン・ジョヴァンニ——第四のアリア

(1275) II 317  
わたしは、あの時わたしが大急ぎでそわそわしながら、辛うじて走り書きで写しとったものを、わたし自身の興味のために、きれいに清書しようと決心したこの今の瞬間にわたしをとらえる不安の念を、わたし自身に対して隠すこともできないし、またそれを制することもできない。わたしの前には、あのときの情景がそのまま立ちあらわれて、あのときと同じように不安の念をよびおこし、またあの時と同じように非難をあびせるのである。

彼は日ごろの習慣にも似ず、彼の文書机を閉めないでいた、それで、机の内容はすべてわたしの意のままに処理できたのであった。しかしそれにしても、わたしが引出しに言いつけかけたやうな、いくらわたし自身に言いつけてわたしのやり口を言いつくろおうとし

ても、無駄なことである。引出しのひとつが引き出されていたのであった。そこには、綴じてないたくさんの紙がはいっていて、その上にはこった装幀の大四つ折版の書物が一冊のついていた。開いた見返しのページには、模様入りの白い紙が用いられており、そこに彼は自筆で「ハテシナキ寛エ書、その四」と書きつけていた。しかし、いまはもはや甲斐のないことではあるが、もしこの書物のそのページが上向きになつていなかったとしたら、もしその奇妙な題がわたしを誘惑することがなかったとしたら、おそらくわたしは誘惑におちいることはなかったであろう、あるいは、せめて誘惑に抵抗するぐらゐのことはしたことであらうと、自分に想像してみたくなるのである。表題そのものが奇体なものであった、しかしその題がそれ自体で奇体であったというよりも、それがおかれている環境のために奇体なのであった、綴じてないばらばらの紙にざつと目をとおしてみてわかつたのだが、それらの紙の内容は、さまざまなエロスのな情景の観察や、あれこれの恋愛関係に関する若干の暗示や、手紙の草案であった、この手紙は、後になつてわかつたのだが、いかにも無造作に書かれたように見えるが、じつはこまかく計算した上で書かれた、芸術的なもの。完全な、まったく独得のものなのであった。この墮落した人間の策謀に富んだ心を見ぬいている今、わたしがあのときの情景を記憶

(276)  
によびもどし、どのような奸計をも見ぬくだけの眼光で、わたしがいわばふたたびあの引出しのところへ歩みよるとしたら、そのときわたしの受ける印象は、警察官が贗造者の部屋に踏みこんで、彼の金庫をあけ、引出しのなかにたくさんのばらばらの紙やためし書きを、つまり、一枚には飾り文字の小さなきれつばし、別の紙には署名の組合せ文字が、また別の一枚には一列の左文字があるのを、発見するときに受ける印象と同じであるにちがいない。彼は、自分の搜索が的中したことをすぐにさるとるにちがいない、そしてそのことに對するうれしさが、まぎれもなくそこに見られる贗造者の研究と熱心さにと對する一種の感嘆とまざり合うのである。

しかし、わたしの場合には、おそらく少しちがつたふうになつたことであらう。わたしは犯罪を捜し出すことに慣れていなかったし、また警察の徽章をつけて武装してもいなかったからである。わたしは、不法なことをしたのだという事実を、二重の重みをもつて感じ

(1) モーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」第一幕で、レポロがエルヴィラの前で歌う、カタログの歌としてよく知られているアリアの終りのほうの一句。ダ・ポンテのイタリヤ語の原文引用されている。この句の前にある、誘惑された女の数と種類をあげる歌詞が記されていない点に、ドン・ジョヴァンニと誘惑者ヨハネスとの根本的な差異が示されていることに注意されたい。

(2) Commentarius perpetuus Nr. 4. とラテン語で書かれている。

たことであらう。

あのとき、わたしは、こうした場合の常として、口をきくことはおろか、考えることさえできなかった。ひとは強い印象を受けると、それに圧倒されてしまい、しばらくしてからようやく反省が頭をもたげ、すばやくあれこれと思いめぐらして、言葉たくみに言いよつてその未知の侵入者にとり入るにいたるものである。そして、この反省の力が発達していれば発達しているほど、それだけ速かに反省は自分を落ちつけることができ、外国旅行者のための旅券を扱う書記のように、奇矯きわまる人物を見慣れているので、容易なことではびつくりしないのである。しかし、いまだこそわたしの反省力もかなり強度に発達しているけれども、あの最初の瞬間には、わたしはまったくびつくりしてしまつたのであつた。あのときわたしはどんなに蒼くなり、ほとんど卒倒せんばかりで、またわたしはそれをどれほど恐れたか、わたしはよくおぼえている。彼が帰宅し、引出しを手にして失神しているわたしを見つけたとしたら、どうであらう——良心のとがめというものは、とにかく人生を興味あるものにしてくれるものである。

この書物の表題が、ただそれだけで、わたしをおどろかしたわけではなかつた。わたしはそれを抜き書きをよせ集めたものだと思つた。彼がいつも熱心に勉強していたことを知っていたので、わたしがそう思ったのも当然

のことであつた。ところが内容はまったく別のものであつた。それは、まぎれもなく一冊の日記であつた。丹念に書きつづられた日記であつた。そして、これまでわたしに彼について知つていた範囲では、彼の生活にそれほど注釈が必要だとはわたしは思つていなかったのだが、一見したところでは、この表題がゆたかな趣味と分別をもつて、彼みずからとその立場について真に美的な、客観的な熟慮をもつて、選ばれたものであることを、わたしは否定しない。この表題は、内容全体と完全に調和しているのである。彼の生活は、詩的に生きるという課題を実現しようとする試みであつた。人生における興味あるものを発見するための器官が鋭敏に発達していたので、彼は興味あるものを見つけるすべを心得ていたし、それを見つげ出すと、いつもその体験をなかに詩的に再現したものであつた。

それだから、彼の日記は史実的に正確なものでも単純な物語でもなく、またそれは直説法でなく、接統法で書かれているのである。いうまでもなく、その体験はそれが体験せられた後に、ときにはおそらくかなり後になつてから、書きとめられたものであるが、それなのに、しばしばそれが今の瞬間におこなわれているのであるかのように、ときにはすべてがすぐ目の前でおこなわれていると思えるほど劇的になまなましく、述べられている。

この日記には何か別のねらいがあるので彼

がそのような書き方をしたのだとは、まったく考えられない。この日記がもっとも厳密な意味で、彼にとって個人的な意義しかもつてはいないことは明らかである。だから、わたしの目の前にあるものが一個の文学作品で、しかもおそらく印刷を予定して書かれたものだときえなそうとするのは、全体の内容から見ても、個々の記録から見ても許されないことである。もちろん、この日記を公けにしたとしても、彼自身は、なにも恐れるにはあたらなかつたであらう。というのには、この記録にあらわれる大部分の名前が、とても実際にはありそうもない珍しい名前だからである。ただわたしは疑問に思っているのだが、局外者は誰もが姓でだまかされるようにしておきながら、彼自身はいつでもまちがひなく実在の人物をそれと認めることができるように、名のほうだけは実際のままにしてあるのではあるまいか。すくなくとも、この記録の興味の中心であるコーディアという少女の場合はそうである。わたしはその少女を知っているが、彼女はまさしくコーディアという名であつた。しかし姓はヴァールとはいわなかつたのである。

ところで、それにもかかわらず、この日記がそれほど文学的な色彩をおびているという事実は、どう説明すればいいのであらうか？ この問いに答えるのは、むずかしいことではない。それは、彼のうちにある詩人的な素質

320から説明がつくことである。つまり、その詩人的な素質というのが、それほど豊かではなかったからというか、それほど貧しくはなかったからというか、とにかく、詩と現実とをたがいに切り離しておくことができないようなものであったのである。詩的なものは、彼がたずさえてもってきたプラスなのである。このプラスこそ彼が現実の詩的狀況のなかで享楽した詩的なものであり、このプラスを彼は文学的反省の形でふたたび受け取ることになったのである。これはまた別の享楽であった、そして享楽こそ彼の全人生の動機だったのである。さきの場合には、彼は美的なもの的人格的に享楽したのであり、次の場合には、彼は自分の人格を美的に享楽したのである。さきの場合には、一部は現実が彼にあたえ、一部は彼自身が現実にはらませたものを利己的に、個人的に享楽したというところに重点があり、次の場合には、彼の人格が影をうすくしていつて、そこで彼は状況と状況のなかにある自分自身を享楽するのである。前の場合は、彼は機縁として、契機として、つねに現実を必要としたのであるが、後の場合には、現実が詩的なものに溺れてしまっているのである。このようにして、この第一段階の果実が、日記を生み出してくる情緒なのであって、日記はこの情緒から第二段階の果実として生まれ出たのである。もっとも、この果実という言葉は、第二の場合では第一の

場合とはすこしちがった意味に解せられているのではあるが。このようにして、彼はたえず、彼の生活そのものにとまっていたる両義性をおびた詩的なものをもっていたのである。わたしたちの生きている世界の背後に、はるかはるかあなたの背景に、第二の世界がある、これとそれとの関係は、ちょうど劇場でときとして実際の場面の背後に見られる第二の場面が、実際の場面の背後に似て似ている。薄いヴェールを通して見られるこの第二の世界は、いわばヴェールの世界で、現実の世界よりもいつそう軽く、いつそう稀薄で、現実の世界とは質のちがった世界なのである。多くのひとびとが、肉体的には現実の世界に姿をあらわしてはいるが、この現実の世界をおのれの住み家とせず、かえってあの別世界に住んでいるのである。しかも、人間がこうして現実の前で影をうすくし、いや、ほとんど現実から姿を消してゆくということは、健康のせいなのか、それとも病のせいなのか、どちらかである。わたしがよく知らずにこれまでつき合っていたあの男の場合は、それが病のせいなのであった。彼は現実には属していなかった。それなのに、えらく現実にかわり合っていた。彼は先へ先へとかけて行つて現実を追い越していった、そして、彼がもっとも現実を身をゆだねきつていた時でさえ、彼は現実の外に超然と立っていたのである。けれども、彼を現実の外へ誘い去らせるもの

321は善ではなかった、しかしまた、それはじつは悪でもなかった、いまの場合でさえ、わたしはとも彼について悪を云々することができないのである。彼にはいくらか脳増悪の傾(1)「美的なものと倫理的なものとの境界線」という意味で、「転機」の範疇とか「境界」の範疇とかと呼ばれている重要な概念。四一八ページおよび四一八ページの注を参照。(2) 前注のそれとはちがって、美学の特殊な範疇とされているもので、目先がかわっていてひとの興味をひくもの。意。「興味あるもの」および「興味ある」の語は、前注のような意味とこの場合のような意味と、二つの違った意味で用いられることに注意されたい。詳しくは、四一八ページおよび四一八ページの注を参照。(3) キルケゴールの恋人レギーネ・オルセンには、コデリアという姉があった。この姉は、キルケゴールに厚意をもっていて、婚約破棄の後も、彼を悪い人間とは思っていない。『誘惑者の日記』は、レギーネを突きはなすために書かれたものであり、キルケゴールはレギーネの家族が彼女におよぼす影響を重要視していたので、好意をもってくれていたコデリア・オルセンをも自分の敵にさせようという意図から、ここにコデリアの名がえられたのである。とヒルシュは推定している。(4) exacerbatio cerebri. これは病名ではないらしい。exacerbatio というのは、病患または症状が増悪すること。つまり病状の昂進を意味する語で、したがって exacerbatio cerebri といえは、何か脳疾患があつて、これが増悪すること、あるいはその増悪の状態を意味することになるが、キルケゴールは、それとは違つて、単に、脳のはたらきが異常に興奮することをいっているように思われる。つまり、想像力が異常なまでにはたらくこと、一種の異常にたくましく想像力と見ていいだろう。一八三八年の日記に、この語が書きとめられており、一八三八年七月十七日のエミール・パーセン宛の手紙では、キルケゴールは、これを自分自身の状態として述べている。

向があつて、この症状におちいると、現実には十分な刺戟をもたず、せいぜいつかのまの刺戟を与えるにすぎないのである。彼は現実の重味でくじけたのではなかった。彼が現実にならうのに弱すぎたのでなく、むしろ彼は強すぎたのである。けれども、その強さが彼の病だったのである。現実が刺戟としての意義を失うやいなや、彼は武装を解除されてしまったのであった、そして、この点に、彼の悪があつたのである。彼は刺戟を受けている瞬間にあつてさえも、この事実を意識していたのである、そしてこの意識のなかに悪がよこたわつていたのである。

ある少女にまつわる事件がこの日記のおもな内容をなしているのであるが、その少女をわたしは知っていた。彼がほかにも多くの少女を誘惑したかどうか、わたしは知らない。けれども、彼の記録からおして、そういうこともありそうに思われる。それと同時に、彼のおこなつたいくどかの誘惑は、それぞれ種類のちがつたものであつて、そこにいかにも彼らしい特徴があるのである。つまり、彼は月並な意味の誘惑者であるには、あまりにも精神的にすぎた素質に生まれついていたのである。日記でもわかることなのだが、彼が渴望したものは、たとえば、かりそめの会釈といたつたような、じつにたわいのないものである場合が多く、けつしてそれ以上のものを彼は受けとらうとはしなかったが、それは、そ

のたわいのないものこそ、相手の女のもつてい  
るもつとも美しいものだったからである。天  
から授かった精神的才能によって、彼は少女  
を魅惑し、少女を自分のほうへひきつけるす  
べを心得ていたが、しかし、それ以上に厳密  
な意味で彼女をわがものにしようなどつと  
めはしなかった。わたしには想像できるのだ  
が、少女がすべてを捧げる気になっていると  
いう確信がもてるようになる最高潮まで、彼  
は少女のころをかりたてるすべを心得てい  
た、そして、そこまでくると、彼は突如とし  
て関係を断ち切つて、彼のほうからは近づく  
こととする気配をみじんも示さず、愛の言葉ひ  
とつもれ落ちないのはおろか、ひとことの弁  
明も、ひとことの約束もなされないのである。  
しかも、事実はそのとおりなのである。この  
ような別れ方を意識するのは、不幸な女性に  
とつては、二重にせつないことであつた。と  
いうのは、何をどう訴えようにも、彼女には  
何ひとつ手がかりがなかったからであり、ま  
た、いま自分を責めて彼をゆるしていたか  
と思つた、こんどは彼を責めているというふう  
に、彼女はおそろしい魔女の踊りに加わつて、  
こもこも移り変わる気分になえず翻弄されね  
ばならなかったし、それに、彼らの恋愛関係  
はけつきよく比喩的な意味でしか現実性をも  
つていなかったのであるから、すべては空想  
だったのであるまいかという疑念と、彼女  
はたえず戦わなければならなかったからであ

る。誰にも彼女はころをうちあけることが  
できなかった、じつをいえば、彼女はひとに  
うちあけられるようなものを何ももつていな  
かつたのである。夢を見たのであれば、その  
夢をひとに物語ることもできる。けれども、  
彼女が物語らなければならなかったものは、  
けつして夢ではなかった、それは現実であつ  
た、それなのに、彼女がそれを他人に話して、  
悲しい胸のうちをやわらげようとすると、た  
ちまち無に帰してしまふのであつた。彼女自  
身はそれをかなりよく感じていた。けれども、  
それをはつきりととらえることは誰にもでき  
なかつたし、彼女自身にもほとんどできなかつ  
た。しかも、それはおそろしい重みをもつ  
て、彼女の頭上にのしかかつていたのであつ  
た。

それだから、このような犠牲者たちは、ま  
つたく独得な性質のものであつた。それは、  
世間からつまはじきされて、あるいは、つま  
はじきされたものと自分で思ひこんで、健全  
にそして激しく悩み悲しみはするが、いつた  
ん思ひがここにあふれるほどつもりつもと  
ど、憎しみが赦しかのいずれかに心ゆくまで  
胸の思いを晴らすことができたというやうな、  
不幸な少女たちでもなかつた。彼女たちには、  
それと目につくような変化はすこしもあらわ  
れなかつた。彼女たちはこれまでと同じよう  
に見なされて、いつもと同じ境遇で生活して  
いた。それでいて、彼女たちは、彼女たち自

身にもほとんど説明がつかず、他人にも理解できないような変り方をしてるのである。

彼女たちの人生は、かの少女たちのそのように、へし折られたり、うち砕かれたりしてはいない、自分自身のなかへねじこめられてしまっているのである。彼女たちは、他人の目には無いも同然で、いたずらに自分自身を見いだそうとしていたのである。彼の歩く人生行路はその足跡をたどることができない、(つまり、彼の足は足跡をあとに残さず足につけたままもっていつてしまふようにできていたのである、このように考えてこそ、わたしは彼の無限の自己反省をもっともよく表象できるのである)といえるかもしれないが、それと同じ意味で、彼の犠牲となつたものはなかつたのである。彼は普通の意味の誘惑者であるにはあまりにも精神的にすぎる生き方をしていたのである。けれども、時には彼も、仮現的の身体をおびることもあつたし、ただ官能ばかりになりきることもあつた。彼とコイデリアとの事件でさえもひどくこみいって、彼のほうが自分こそ誘惑されたのだと言ふこともできるのである、いな、不幸な少女でさえが、時にはどちらなのか決しかねて、途方にくれかねないわけで、ここでも彼の足跡はきわめて不明瞭で、どう証明のしようもないのである。個々の女性は、彼にとつては刺戟剤でしかなかったのである。木々が葉をふるいおとすように、彼は彼女たちを振りお

とした——彼は若がえり、木の葉は凋落した(ちようらく)のである。

しかし、彼自身の頭のなかはいったいどうなのであるか？ 他人を迷わせたのと同じように、彼はけっきょく自分でも迷つてしまふのだ、とわたしは思う。彼は他人を迷わせはしたが、それは外面的なことがらではなく、彼ら自身に関する内面的なことがらであつた。

323 (280)  
道に迷つて途方にくれている旅人をまぢがつた道に導いて、まぢがつたまま置きざりにするとしたら、それはじつにけしからぬことである。けれども、それは、ひとを自分自身の中で迷わせるのにくらべたら、何ほどのことでもありはしない。道を誤つた旅人には、まぢでも、周囲の景色がたえず移り変わるという慰めがあり、景色が変わることに正道への抜け道を発見するかもしれないという希望が生まれる。ところが、自分自身の中で迷つてゐる者には、動き廻れるそれほど大きな領土がなく、それが脱け出るののできない堂々めぐりであることに、彼はすぐ気づくのである。彼自身の場合もそれと同じことで、それがもつともつとはるかにおそるべき規模でおこるのだとわたしは考える。良心が目をさまして、この迷路から脱出しなくてはならない時なのに、導きの糸を見失つて、そこで自己の鋭敏な才能をあげて自分自身にふりむける陰謀家、これ以上にはげしい苦しみをわたしは考えることができない。彼の狐穴にはたく

さんの出口があるが、それがすべてむなししいのである、悩める彼の魂は日光がさしこむのを見たようにすぐ思いこむが、その瞬間に、それが新たな入口だとわかる、そのようにして、彼は追いつめられた獣みたくに、絶望にかられて、たえず脱出口をさがし求めるが、見いだされるものは、いつでも、彼が自分自身の中へ帰つていく入口なのである。このよ

うな人間はかならずしも犯罪者と呼ばれうるような者ではない、彼は自分の詐謀にみずから欺かれてゐることがしばしばで、しかも彼には犯罪者以上におそろしい罰があたるのである。おもに、悔恨の苦痛でさえ、この意(1) Paranoia という語が用いられている。原典の注釈者は、異教徒たちによつて、キリストがおびていたと考えられた「見かけだけの」肉体で、現実の人間の肉体とは異なつたものと考えられた、と述べている。また、ジョンソンは、この語は、一世紀に、キリストの身体の本性に關する教会とグノシス派との論争で用いられたもので、グノシス派によつて、キリストの身体はロゴスがおびた「仮りの」体にすぎないと主張されたことに由来すると述べている。つまり、グノシス派が、肉体を惡と考へたところから、神の子キリストが人間として肉をおびてあらわれたのは、単にそう見えるにすぎないとした、いわゆるキリスト仮現説にかかわるものである。記者には、出所の調べがつかないで、この説にしたがつて「仮現的の」と訳してゐた。この語そのものは「そばにいる」「つきそう」を意味するギリシア語からきたもので、語義は、雪ないし精神に「つきそう」身体の意であるうと思はれる。ヒルシュは、悪魔が道具として用いる「憑かれた人の肉体」と注している。ここでは「血肉をもつた」というほどの意味で用いられているのであろう。

識された狂気にくらべたら、何であろう。彼がうける罰は、純然たる美的性格のものである。つまり、良心がめざめるという言葉さえ、彼の場合には、あまりにも倫理的にすぎるのである。良心は、彼の場合には、単に一種の高級な意識という形をとるだけのこと、それは不安定なところとしてあらわれるが、それ以上に深い意味で彼を告発するようなことはさらになく、ただ彼を目ざまさせておいて、たえまなく徒勞な活動にかりたて、けつして彼に安息をあたえないのである。彼は、狂気しているのでもない。なぜなら、彼のいろとりどりの現世的な思いは、狂気という永遠の中に化石化されたものではないからである。

あわれなコーデリア、彼女にとつても、平安を見いだすことは困難であらう。彼女は心の底から彼をゆるしてみる、けれども彼女は安らいを見いだすことはできない。疑念がめざめてくるからである。婚約を破つたのはわたしではなかったか、この不幸のもとはわたしではなかったか、非凡なことを求めたのはわたしの高慢さではなかったかという疑念が。そこで、彼女は悔いてみる、けれども彼女は安らいを見いだすことができない。奸策をもちいてこの計画をわたしの心のなかへもちこんだのは彼女のだ、と彼を糾弾する考えが浮かんで、彼女の無罪を宣するからである。そこで、彼を憎んでみる、彼女の心は呪いの言葉を吐き出すことで軽くなったような気が

する、けれども、彼女は安らいを見いだすことができない。またしても、彼女は自分を責めるのである。自分こそ罪ぶかい女であるのに、そのわたしが憎んだのだ、といって自分を責め、彼がどれほど悪辣だったとしてもやはりどこまでもわたしに罪があるのだ、といって自分を責めるのである。彼が彼女を欺いたということは、彼女にとっては、つらいことである。けれども、彼が彼女のうちにおしやべりな反省のはたらきをめざめさせて、彼女が謙虚な心でただ一つの声だけに耳をかたむけることがもはやできず、たくさんの話を同時に聞くことができるまでに彼が彼女を美的に発達させてしまったのだ、と言いたい気持ちに誘われたとしたら、いっそうつらいことであらう。そのとき、思い出が彼女の心にめざめる、彼女は過失や責任を忘れる、彼女はすばらしくった瞬間瞬間を思い出し、不自然な興奮に陶酔してしまふ。このような瞬間には、彼女は単に彼のことを思い出すばかりでなく、一種の明察で彼を理解するのであるがこの明察そのものが、彼女がすでにどれほど発達しているかの証拠にはかならないのである。そのとき、彼女は、彼を犯罪者と見るのでもなければ、高貴な人と見るのでもなく、彼女は彼をただ美的に感ずるだけなのである。彼女はいつかわたしに一通の手紙を書いてよこしたことがあるが、そのなかで、彼女は彼について彼女の気持を次のようにいいあらわ

(281)

している。

「ときには、わたくしが女性であることを否定されたのではないかと思うほど、それほど彼は精神的でしたが、また別のときには、こわくてわたくしが身ぶるいするほど、彼は荒唐しく情熱的で、欲情に燃えておりました。わたくしがまるで見知らぬ人でもあるかのように彼にあしらわれることがあるかと思えば、彼がまったく身をまかせきつてしまふこともありました。そんなとき、わたくしが腕で彼を抱きしめますと、ときおりすべてがたちまち一変して、わたくしは『雲をかかえ』ているのでした。この言葉をわたくしは、彼を知るまえから知ってはおりましたが、彼に教えられてはじめてその意味がわかったのです。この言葉を使うとき、わたくしはいつも彼のことを考えます、もつとも、わたくしが何を考えるにしても、彼に結びつけてしか考えられないのではありますが。わたくしはつねづね音楽が好きでしたが、彼はいつでも共鳴するたぐい、まれな楽器でした、彼はどの楽器ももっていないほどの音の幅をもっておりました。彼は、あらゆる感情と情緒との総和でした。どんな思想も彼には高きにすぎるといふことはなく、どんな思想でも、絶望的にすぎるといふことはありませんでした。彼は秋の嵐のごとく吹きすさぶこともできれば、聞きとれぬほど声ひくくさやくこともできました。わたくしの言葉はひとつとして

影響をあたえずにはおりませんでした、でも、わたくしの言葉がまちがいに影響をあたえたとも、わたくしには言えませんが、どんな影響をあたえたか、わたくしにはとうていわからないことだったのですもの。

わたくし自身が呼びおこしたものでありながら、しかもわたくしが呼びおこしたものでないともいえるこの音楽に、わたくしはなんともいえない、けれどふしぎな、この上なかつたのしい、名状しがたい不安をいだきながら、耳をかたむけました。そこには、つねに調和がありました、彼はつねにわたくしの心をさらしてしまふのでした<sup>325</sup>。

このような事態は彼女にとっておそろしいものである、だが彼にとっては、なおいっそう恐ろしいことであろう。この事件に思いついたるたびにわたしを襲う不安を、わたし自身がほとんど制御できないという事実から、わたしはそういえるのである。わたしですが、この霧の国に、たえまなく自分自身の影におびえさせられるこの夢の世界に、ともども連れこまれていのである。わたしはいくどとなく、そこから抜けだそうと努力するが、かいたない、わたしはおびやかす影として、無言の告発者として、いっしょにつきそつてゆくのである。なんと奇妙なことであろう！<sup>(282)</sup> 彼は、すべてをもっともふかい秘密のなかにつんでいたのだが、しかもその秘密よりもさらにふかい秘密があるのである。それはわ

たしが彼の秘密にあずかり知っているという秘密、わたしがじつに不法なやりかたで彼の秘密の関知者となつた、という秘密なのである。すべてを忘れる、それはできないことであらう。わたしはこれまでにも、いくたびかこのことについて彼と話をしようと思つたことがある。けれども、話をしても、なんの役にもたつたかつたことであらう、彼はすべてを否認して、あの日記は文学としての試みなのだと主張するか、それとも、わたしに沈黙を命ずるか、したことであらう。わたしが彼の秘密の関知者になるにいたつたいきさつを考えてみれば、彼のその命令を拒むなどということはわたしにはとうていできないのである。それにしても、秘密ほど、多くの誘惑と多くの呪いにとつつまれたものはない。

コーデリアからわたしはひとたばの手紙を受けとつた。それが全部なのかどうか、わたしは知らない。しかし、幾通かは彼女自身の手もとにとつてあるといつかほめのかしたことがあつたような気がする。わたしはその写しをとつてあるので、それをいま清書しているこの記録の中に編みこもうと思う。それらの手紙には日付けがついていないが、日付けがあつたところ、たいして役にはたつたかつたであらう、というのは、日記そのものが先に進むにつれて、だんだんと日付けを記入することがすくなくなり、終りごろになると、二、三の例外を除いては、まったく日付けが

なくなっているからである。それはまるで、この物語は先に進むにつれて、質的に重要な意味をおびてきて、歴史的な現実であるにもかかわらず、次第に理念であることに接近してゆき、それがために時間の規定などはどうでもよいものになつたかのである。ところが、ありがたいことに、日記のところどころに、二、三の合言葉が見つかった。はじめわたしにはその意味が読みとれなかつたが、それらの言葉を手紙とくらべ合わせてみて、わたしはやがて、それらの言葉が手紙の動機をなしていることを見てとつた。そこで、手紙を正しい個所に挿入するというわたしの仕事はわけのないものになつた。わたしは手紙の動機が暗示されている箇所へ、手紙をつぎつぎと入れていけばよいからである。もしわたしがこの導きとなるヒントを発見しなかつたとしたら、わたしは誤解のそしりをまぬがれなかつたことであらう。なぜなら、今でこそ、そうありうなことは日記から察せられ

(1) clairvoyance しばしば好んで用いられるフランス語である。

(2) イクシオンがヘラを犯そうとしたとき、ゼウスは、雲でヘラの似姿をつくり、これと交わらせたという神話によつたもの。

(3) この手書の下書きが(表現は少しちがうが)は、一八四一年の手稿のなかに見いだされる。『誘惑者の日記』に最初にベルリンへ旅立つ前のもので、『誘惑者の日記』に關する最初の草稿と見なされ、そのときすでに、この作品が構想されていたことが知られる。

ることであるが、時には手紙が矢つぎばやに送られて、彼女が一日に数通も受けとつたらしいことに、わたしはきつと思ひもつかなかつただろうからである。もしわたしが自分勝手な考えで処理せざるをえなかつたとしたら、わたしはきつと手紙を均等に分けて配置してゐたことであらうし、また、コーデリアを情熱の絶頂においておくための手段として、その他のあらゆる手段と同じように、彼が用いた手紙という手段に彼がうちこんだ情熱的なエネルギーによつて、彼がどのような効果をおさめたかは、わたしには夢にも感じとれなかつたことであらう。

彼とコーデリアとの恋愛関係についての完全な説明のほかに、この日記には、いくつかの短い叙述がところどころに挿入されている。そういう叙述のある箇所には、いつも欄外に注意！と書いてあるのであつた。これらの叙述は、コーデリアの物語とはまったく関係のないものであるが、しかし、彼のよく用いた言葉で、これまでわたしが別なふう理解していた「いつでも、小さな釣糸を一本、別に投げておかなくてはならぬ」という言葉の意義を、はっきりとわたしにわからせてくれた。この日記のもつと先の部分がわたしの手にはいつていたなら、彼みずからどこか欄外で、遠く目ザス作戦行動と呼んでいるという叙述に、おそらくわたしはいくども出くわしたことであらう。そう想像できるのは、

コーデリアのことで心がいつぱいで、わき見をしている余裕などなかつたのだ、と彼みずから述べているからである。

彼は、コーデリアを見すてからまもなく、彼女から幾通かの手紙を受けとつたが、彼は封もきらずに送り返してしまつた。コーデリアがわたしに渡してくれた手紙の中に、それらの手紙もまじつてゐた。彼女が自分で封を切つてくれたのだから、わたしがその写しをとつてもさしつかえあるまいと思う。それら<sup>327</sup>の手紙の内容については、彼女はいちどもわたしに話したことがない。けれども、彼女は、話がヨハンネスとの関係にふれるたびに、たしかゲーテの作になる短い詩句を、いつもきまつてくちずさみ、しかも、その詩句に、彼女は、その時その時の自分の気分に応じて、また、それぞれ異なる気分にあふましい抑揚をつけて、その時々異なる意味をふくめていたようであつた。

行きたまえ。

ふりすてたまえ

操をも。

悔恨は

やがて来たらん。<sup>328</sup>

それらの手紙の内容は次のとおりである。

ヨハンネスさま！

わたくしはあなたを、「わたくしの」とはおよびいたしません。いまわたくしにはつきりとわかるのですが、あなたがわたくしのものであつたことなどいちどかつてなかつたのです、ですからいまわたくしは、あなたをわたくしのものと考えてかつてわたくしの心をよろこばせたことの手きびしい罰を、いやというほど受けているのです。でも、やっぱり、わたくしはあなたを、「わたくしの」とおよびます。わたくしの誘惑者、わたくしの欺瞞者、わたくしの敵、わたくしの殺戮者、わたくしの不幸の源、わたくしの喜びの墓場、わたくしの破壊の深淵。わたくしはあなたを「わたくしの」とよび、わたくしを「あなたの」と申します。そしてこの言葉は、かつては、あなたをお慕ひするわたくしの声に誇らかに傾けられたあなたのお耳に快くひびきましたように、いまでは、あなたに対する呪いのように、永劫の呪いのように、ひびくことでしよう。わたくしがあなたを追いかけるつもりでいるとか、手に七首をふりかざしてあなたの嘲弄をかうつもりでいるとかとお思ひになつておよろこびになつてはいけません。どこへなりとおすきなところへお逃げなさい、それでもわたくしはあなたのものです。世界のはてまでお逃げなさい、それでもわたくしはあなたのものです。ほかの女を百人も愛しになるのもいい、それでもわたくしはあなたのものです、いいえ、死の瞬間にもわたくし

328

ヨハンネスさま！

彼は、大きな家畜や小さな家畜をどっさりもっておりまして。それから、ひとりの貧しい少女がありました。彼女は、ただ一匹の小羊しかもっていませんでした。その小羊は彼女の手から喰い、彼女の杯から飲んでいました。あなたはそのお金持の男で、この世のありとあらゆるすばらしいものを豊かにもっておりませんでした。わたくしはその貧しい少女で、わたくしの愛だけしかもってはいませんでした。あなたはその愛を取りあげ、その愛でたしまれました。それから、あなたは欲望に誘わ

(284)  
しはあなたのものです。わたくしがあなたにむかつて使っておりまうした言葉そのものが、わたくしがあなたのものであることの証拠なのです。あなたは、あなたがわたくしにとつてすべてとなるまでに、ですから、わたくしがあなたの奴隷となることにすべてのよろこびを見いだすようになるまでに、ひとりの人間を欺くことをあえてされたのです。わたくしはあなたのものです、あなたのものです、あなたの呪いです、あなたの呪いです。あなたの呪いです。

あなたのコーデリア

ヨハンネスさま！

れて、わたくしのわずかな持ちものを犠牲にされました。あなたご自身の持ちものは何ひとつあなたは犠牲になさいませんでした。しかし、ひとりのお金持の男がありました、その男は大きな家畜や小さな家畜をどっさりもっておりまして。それから、ひとりの貧しい少女がありました。彼女は愛だけしかもってはいませんでした。

あなたのコーデリア

もう望みはまったくないのでしょうか？

あなたの愛はもう二度と目をさましてはくれないのでしょうか。だって、あなたはいままでわたくしを愛していられしたのではありませんか。わたくしはそう信じています。どうしてわたくしにそんな確信がもてるのか、わたくしにもわかりませんけれど。わたくしは待ちましよう。どれほど遠い先のことになろうとも。わたくしは待っています、待ちますとも、あなたが他の女たちを愛することに倦きておしまいになるまで。そのときがくれば、わたくしに対するあなたの愛がきつと愛の墓場からよみがえってくるでしょう。そのときには、わたくしはいつものようにあなた

を愛するでしょう、いつものように、いいえ、かつてのように、あなたに感謝するでしょう、ああ、ヨハンネスさま、かつてのように！

ヨハンネスさま！ わたくしに対するいまのあなたのつれない冷たさ、これがあなたのほんとうのお人柄なのでしょう。あなたの愛は、あなたの豊かなお心は、嘘いつわりだったのでしょうか。いまのあなたが、ほんとうのあなたご自身に帰られているのでしょうか。

わたくしの愛をがまんなさってください、わたくしがいつまでもあなたを愛しつづけます。こととおぼろしく、わたくしの愛があなたにとつて重荷であることは、わたくしよく存じております。でもきつと、あなたがあ

(1) actions in distans 直接に、誘惑の対象であるコーデリアを目さすのではなく、コーデリアに対してはいわば間接的に、遠くに目標をおいた作戦行動の意。キルケゴールは一八四一二年 (Kapitel III B 35) に「この日記はコーデリアの物語からはじめるべきではなく、最初の action in distans をもってはじめねばならぬ」と書きとめている。このような「遠くを目さす作戦行動」の挿入文章が、この日記には十一ふくまれている。その最初のものは、この序文といふべき文章につづく四月四日の日記である。たとえば、とくにそこにあるディータの小説の女主人公に関する記事に注意されたい。

(2) ディータの『イェーリとペーテリー』Jery und Hietely という歌唱劇から、ドイツ語で引用されている。

(3) 『ドン・ジョヴァンニ』のドンナ・エルヴィーラを諷している。

(4) 主が予言者ナタンをつかわして、ダビデの罪悪を責めさせられたときに、ナタンがダビデに語った比喩(サムエル後書一二・一二六参照)を模して書かれている。

なたのコーディネアのもとに帰ってくださる日  
がくるでしょう。あなたのコーディネア！こ  
のお願いのことはをお聞きください！あな  
たのコーディネア、あなたのコーディネアです。

あなたのコーディネア

(285)329

コーディネアは、彼女が彼女のヨハンネスに  
讃嘆したほどの音の幅をもつてはいなかった  
けれども、それでも、彼女も音の変化に欠け  
てはいなかったことは明らかである。たとい  
彼女の表現にはある程度まで明瞭さが欠けて  
いるにしても、彼女の気分は右の手紙のひと  
つひとつのうちにはつきりとあらわれている。  
ことに、第二の手紙がそうである。あの手紙  
では、彼女の気持がよくわかるというよりは  
むしろ手感されるばかりなのだが、しかし、  
そのような表現の不完全さこそ、あの手紙が  
わたしをいたく感動させるゆえんなのである。

表現の不完全さ

(286)330

四月四日

気をおつけなさい、どなたか知らないが、  
美しい<sup>おきた</sup>女人よ！気をおつけなさい。馬車か  
ら降りるのは、なまやさしいことではありま  
せん、時には、万事を決する一步ともなりか  
ねないのです。なんなら、テイクの小説を  
お貸しいたしましょうか。それをお読みにな  
れば、ひとりの婦人が、馬から下りるときの  
一步で、全生涯の運命を決することになるほ  
どの紛糾に巻きこまれてしまいうきさつがお  
わかりになるでしょう。それに、馬車の踏み  
段というやつは、ふつうひどく不細工な取り  
つけ方がしてあるので、上品さなんでものに  
はまるきりかまっていられず、必死になつて  
駈者だの従者だの腕のなかに飛びこまざる  
をえなくなるのです。ほんとに、駈者や従者  
というものは、なんてしあわせなんだろう！  
ほくも、どこか若い娘さんたちのいる家の下  
男の口でもさがそうかと本気で考えますよ。  
下男になれば、そういうかわいなお嬢さんの  
秘密に、苦もなくあずかれるというものです  
からね。

だが、ごしうだから、どうか跳ばないで  
ください。お願いです。暗がりではありませ  
んか。ぼくがあなたの邪魔になるわけはあり  
ません。ぼくはあの街灯の下へ行つて立つて  
いましょう、そうすれば、見ようたつて、ぼ

(287)

331

くはあなたに見えはしない。いつだって人に  
見られていると思っただけできまりのわるい  
ものですが、人から見られていると思うのは、  
ただいつでも自分のほうから相手が見えるか  
らのことです。——ですから、もしかしたら  
そんな跳躍を受けとめることができないかも  
しれない下男のための思つて、絹の衣服のこ  
とを思い、また裾飾りのためを考えて、ぼく  
のためを思つて、じつにスマートなのでぼく  
がかねて感嘆してやまなかったかわいらしい、  
小さなあなたの足を、その足を、世間へ出し  
て試してみてごらんなさい。きつと足場にと  
どくのだと、思いきつてあなたの足をあてに  
するんです。一瞬、ぞつとしますよ。足のお  
ちつくところが探してもさぐりあたらずよう  
な気がするからです。いや、足場を見つけて  
からでも、まだこわいかもしれません。もし  
したら、もう一方のほうの足をすばやく引き寄  
せるんです。あなたをそんな姿勢で宙にぶら  
ぶらさせておくほど残酷な者はきつといない  
でしょう、美の顕現を追うのに、それほど不  
粹で、それほどろまな者はいないでしょう。  
それとも、あなたはまだ誰かでしやばり者が  
あらわれはせぬかと恐れているのですか。し  
かし、それはむろん下男のことではないでし  
ょう、ぼくのことでないでしょう。だつて  
ぼくは、すでにその小さな足を見たことがあ  
るんですもの。それに、ぼくは自然科学者な  
んだから、キュービエから学んで、あなたの